泉大津市文化財調査概要２

豊中遺跡発掘調査概要

１９７６．３

泉大津市教育委員会

はじめに

泉大津の市域は、古い古い歴史を持ち、早くより高い文化遺産を誇る地域として知られています。このような祖先の歴史を伝えている遺跡遺物等の埋蔵文化財は、日本の歴史・文化等を正しく理解すると共に、当時の人々の生き方を学ぶ上に、欠くことのできない大切な民族の遺産であって、大切に保存して後世の人々に継承すべき責任があります。幸にして近年関係各位のご尽力によって貴重な埋蔵文化財が発掘されて参りました。昭和50年度においても刮目すべき成果をあげることができました。ここにその一部をまとめて刊行し、御報告にかえたいと存じます。これからもこれらを手がかりとして、更に努力を続け尊い新資料を発掘調査していただくことを期待してやみません。

泉大津市教育委員会

教育長　中辻　捨二郎

例　　言

1.　本報告書は、泉大津市教育委員会が、泉大津市豊中に所在する豊中遺跡内に於いて、住宅建設工事に先立って実施した発掘調査記録である。

2.　調査は、国庫補助事業（総額5,000,000円、国補助率50％、府補助率25％）として計画し、実施したものである。

3.　調査は、泉大津市教育委員会社会教育課坂口昌男を担当者として、昭和50年6月18日に着手し、昭和51年3月31日終了した。この間佐藤正則、吉川和則、森　茂の諸氏が参加した。

4.　本書の作成にあたり遺物写真撮影は、財団法人大阪文化財センター写真資料室によった。

豊中遺跡発掘調査概要

第1　調査にいたる経過

日本の第2の都市である大阪は、商業都市としてその発展は目ざましいものがある。ビジネス街では昼間人口が夜間のそれを上まわり、周辺都市の人口が増加し、いわゆるドーナツ化現象をきたしている。大阪の南部もその例にもれず、堺・和泉の泉北丘陵には泉北ニュータウンが建設され、その他の市でもベッドタウンとしての様相を帯びてきている。大阪・和歌山を結ぶ国道26号線は、近年の経済発展により、輸送力は限界に達し、交通量の緩和を計るため、第2阪和国道が万国博関連事業として計画され、一部開通となって今日にいたっている。その沿線地域にあたる部分で、堺市・高石市・泉大津市・岸和田市等では区画整理事業を実施し完成も間近いところである。当泉大津市では、豊中に於いて区画整理事業が行なわれている。この豊中は、泉大津の市街化が急速に伸びてきている東方部にあたり、豊中遺跡が存在するところでもある。田畑には土器片が散布しており、早くから遺跡のあることが予想されていた。昭和30年代の後半に府道泉大津中央線が建設され、その時工事に伴って遺物の出土を見、又付近には「大福寺」の字名が残っているところから、寺院跡が存在すると考えられているが、未だ確認されていない。昭和47年に古池が干され、池底から多数の須恵器が発見された。これによって大阪府教育委員会①では、発掘調査を実施し、その結果古墳時代の住居や倉庫等の掘立柱、道路や河川の跡が発見された。又第2阪和国道内の調査②では、古墳時代の竪穴式住居や多数の柱穴跡、中世の井戸等が検出され、大きな集落跡が埋もれていると予想された。区画整理地区内に於いては、昭和48年に大阪府教育委員会と泉大津市教育委員会によって設立された豊中・古池遺跡調査会の試掘調査③で、全域に遺物包含層が認められた。そして遺構の存在が予想された部分を引き続いて調査④した結果、古墳時代初期の竪穴式住居　3棟、河川1本、中世の井戸9個、骨壺1個が検出された。又前記の古池の東南に接する上池からは、河川が発見され、

縄文式土器・古式土師器・古式須恵器等が出土し、平安時代の初期頃までは河川の機能を果たしていたようで、その後に池が築かれたものと思われる。

以上のように、最近に至って豊中遺跡の調査が行なわれるようになったが、これは近年の開発による結果であり、遺跡の周辺部に於いても、試掘調査を行ない、その範囲の確認に努めているところである。本調査概要は、遺跡の性格をより明らかにするため、付近の発掘調査の概略もあわせて記すことにした。

第2　位置と環境

豊中遺跡が存在する泉大津市は大阪府に属し、西は大阪湾、北は高石市、東は和泉市、南は泉北郡忠岡町と接している。その面積は約10.61Km^2、人口は約6万8千人の小規模の市であるが、織物産業が盛んで特に毛布の生産量は全国の95%を占めている。近年はその海岸部を埋め立てて、堺・泉北臨海工業地帯が造成され、泉大津市の部分には公共ふ頭の建設が行なわれ、港湾の都市として新たに大きく発展しようとしている。

大阪と和歌山を結ぶ幹線道路として国道26号線があり、当市の西部を通過する。鉄道としては、私鉄南海本線が国道と平行して走っている。泉大津市内には北より、北助松、松之浜、泉大津の三駅があり、又市内の交通機関として民営のバスが泉大津駅を中心に運行され、市民の足となっている。

地理的に観ると、泉大津市が位置する大阪平野南部は、その東側と南側を葛城山脈に囲まれている。東側は金剛山を主峯とする山脈で奈良県と接し、南側は主峯を葛城山とし和歌山県との境をなしている。泉大津市域には山部はなく、平野部のみであるため早くから墾け、海岸線沿いの紀州街道を中心に民家が建ち並び、田園地帯がその東側に続く。遺跡はその田園地帯に多く存在する。

泉大津市を歴史的に観ると、現在旧石器時代の遺物は発見されていない。しかし、和泉市父鬼[5]や堺市野々井[6]、高石市大園[7]、岸和田市海岸寺山[8]に於いてサヌカイトの石核及び剝片が発見されている。縄文時代になると、豊中遺跡で中期後半及び後期の土器片が出土[9]しており、近くに縄文時代の遺跡の存在が予想さ

れる。弥生時代は、前期中段階のみの土器を出土する池浦遺跡が、現在のところ最も古い遺跡として知られている。続いて、池上・曽根遺跡が前期新段階から後期を経て、古墳時代へと続く。この池上・曽根遺跡は、弥生時代の大溝に囲まれた集落の生成過程を示すと共に、土器の出土量は莫大であり、石製品・木製品も、貴重な資料を提供している。穴師小学校校庭遺跡は、工事中に中期の壺棺が発見された遺跡である。古墳時代になると集落は急に広がり始め、弥生時代のようにまとまってはいない。豊中遺跡もその一つである。数軒単位の住居が分散して集落を構成していたものと思われる。助松遺跡からは、道路工事中に砂層より、弥生式土器（壺）須恵器（甕）が発見された。穴師薬師寺跡は平安時代終末頃から栄えた寺院跡である。大福廃寺は豊中遺跡の中に含まれており、やはり平安時代の末からの寺院で、現在は字名にその名を残している。

第３　遺　構

今年度に行なった調査を地点別に記述する。（図版１）

第１地点（図版２）

泉大津市穴田５１－１

住宅建設に先立つ調査である。道路に沿ってほぼ南北方向に長さ２４ｍ、巾１ｍ、深さ0.６ｍのトレンチを設定した。層序は、耕土、床土、黄茶褐色砂質土、黄灰色砂質粘土、黄色土となり、南側では黄茶褐色砂質土の下に、灰茶色粘質土、灰色細砂が堆積していた。遺物は、黄茶褐色砂質土層に、土師器片、須恵器片、瓦器片が含まれていたが、遺構は検出されなかった。

第２地点（図版２）

泉大津市豊中５８０－２

住宅建設に先立つ調査である。ほぼ東西方向に長さ１4.５ｍ、巾１ｍ、深さ0.８ｍのトレンチを設定した。層序は、耕土、床土、茶灰色粘質土、淡黄色粘

質土、灰色砂利、黄灰色粘質土、黒灰色粘土となる。遺物は、茶灰色粘質土より、数片の須恵器、黒灰色粘土より弥生時代中期の土器1片が出土した。遺構は検出されなかった。

第3地点（図版3）

泉大津市豊中２０５－４

住宅建設に先立つ調査である。南北方向に長さ7.5ｍ、巾１ｍ、深さ１ｍ（一部1.6ｍ）のトレンチを東西２本設定した。（東側・第１トレンチ、西側・第２トレンチ）第１トレンチでは、盛土、旧耕土、床土、黄灰色砂質土、灰黄色土、暗褐色粘土、灰褐色粘質土、灰褐色粘土、灰色小礫混り砂となる。床土、黄灰色砂質土より土師器片、須恵器片、瓦器片、瓦片等が出土した。第２トレンチでは旧耕土、床土、黄灰色砂質土、灰黄色土、暗褐色粘土、茶褐色粘質土、灰褐色粘土、灰色小礫混り砂となる。中央部分で灰黄色土を切って、暗黄灰色粘質土、黄灰色土の入った直径８０cm、深さ２５cmのピットが検出された。黄灰色土の上層より５世紀後半頃の須恵器杯蓋と身の一部が重なって出土した。又床土、黄灰色砂質土より少量の土師器片、須恵器片、瓦器片が出土。

第4地点（図版3）

泉大津市豊中３１６－２

住宅建設に先立つ調査である。東西方向に長さ１１ｍ、巾１ｍ、深さ1.2ｍのトレンチを設定した。層序は盛土を除去すると、旧耕土、黄灰色土、暗褐色土と続き、東側では灰黄色砂質土、西側では茶褐色土、茶灰色小礫混り土が存在し、最下層は灰色砂となる。黄灰色土より瓦器片、土製羽釜片等中世遺物が出土した。なお遺構は認められなかった。

第5地点（図版4）

泉大津市豊中３６６－２８

住宅建設に先立つ調査である。東西方向に長さ１０ｍ、巾１ｍ、深さ1.4ｍ

（一部1.8ｍ）のトレンチを設定した。層序は約0.8ｍの盛土を除去すると、旧耕土、灰白色砂質土、灰黄色土、黄灰色粘質土、灰茶色粘質土、灰色砂、茶灰黄色粘土、暗褐色粘土、暗灰色砂となる。灰黄色土面で、茶灰色砂質土の入った直径６０*cm*、深さ３０*cm*のピット１個が検出された。遺物は認められなかった。

第６地点（図版４）

泉大津市豊中３６６－５０

住宅建設に先立つ調査である、第５地点の南約４０ｍの箇所。東西方向に長さ８ｍ、巾１ｍ、深さ1.7ｍのトレンチを設定した。層序は約１ｍの盛土を除去すると、旧耕土、灰白色砂質土、黄灰色砂質土、灰色砂質土、灰色砂、灰色小礫混り砂、暗褐色粘土となる。灰色砂質土より数片の土師器が出土したのみである。遺構は確認されなかった。

第７地点（図版５）

泉大津市豊中５８６、５８７、５８８－１

住宅建設に先立つ調査である。第２地点の南西約２０ｍの箇所。東西方向に長さ４８ｍ、巾１ｍ、深さ0.9ｍ（一部1.7ｍ）のトレンチを設定した。層序は表土、茶灰色土、黄灰色砂質土、暗灰色粘質土と続き、西側では茶灰色土の下に暗茶灰色小礫混り土、灰色砂質土となる。その下層は灰色砂、灰色砂利、灰色粘土、暗灰色粘土混り砂、灰色細砂、黄色小礫となる。茶灰色土と黄灰色砂質土から数片の土師器が出土した。遺構は検出されなかった。

第８地点（図版６）

泉大津市豊中４４４－１

調査は現地表面（耕土・床土）の除去作業から開始した。耕土・床土２０*cm*を除去すると、黄灰色粘質土が全体に現われた。この層は、附近一帯に広がりを持つと考えられる、後世の整地層及び攪乱層であると思われる。同層内には、

須恵器、土師器、瓦器などが細片となり混入していた。この層を除去する作業と平行して下層部遺構確認の為に、東・西方向のトレンチを入れた。その結果、溝状遺溝1本・自然流路と考えられる溝1本の計2本の流路を検出した。これら2本の溝が位置する層は、黄灰色粘質土下10cmに広がる黄色粘質土（地山面、一部に灰色が混り砂質土になる）から始まるものであることが認められ、全体に黄灰色粘質土の除去作業を行なうことにしたが、層位状態を見る為に、5m四方のグリッドを4個所設定し、それぞれを遺構上面まで掘り下げた。

なお、グリッドNo.は、東方向から、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳとし、溝遺構においては東からA・B溝と仮称した。

グリッドⅠ

黄灰色粘土下には、他層の堆積は見られず、又、遺物の混入などもなかった。地山面まで下げ終った所で、A溝右岸上面を検出したが、他に遺構は全く認められなかった。

グリッドⅡ

黄灰色粘土下には、Ⅰと同様他層の堆積が見られず、Ⅰと同位のレベルで、A溝を検出した。Ⅰでは、右岸の一部検出で終ったが、Ⅱの位置は、同溝のほぼ全体（横幅）を検出できる状態にあった。

グリッドⅢ

黄灰色粘質土下10cm、B溝（自然流路）右岸を検出したが、他に遺構らしきものは認められなかった。

グリッドⅣ

グリッドⅠの右隣に位置し、層位状態もⅠと同様他土の堆積は全く認められなかった。地山面上において、若干のピットが確認でき、その中の一つは、壺形土器、Ⅳ（Ⅴ）様式のものが入っていた。また、ピットの位置する横には、溝状遺構を検出したが非常に浅く、内部の土砂堆積状態も、粘土層が見られるだけであった。土器片の入ったピットを中心として、点在する他のピット内にも、時期不明の土器片の混入が見られた。

A　溝

グリッドⅠ・Ⅱにかかる溝は、附近一帯で検出される流路方向（南北）と一致する。溝幅は、5.9m・深さ1.3m内外のU字溝である。溝内土層の堆積状態は、上面から下層にいたるまで、砂礫層・砂層が著じるしく堆積していた。しかし、両岸肩部から、下層、最下層にいたっては、青灰色、暗灰黒色粘土の堆積が見られた。出土遺物の大半は、この粘土層からのもので、弥生第Ⅴ様式（古）がほぼセットとして出土した。なお溝中位の砂礫層中より、円形浮文を配した壺形土器の口縁部1点採集している。

前記で述べた土砂堆積のおびただしい中で、それぞれの土砂の切り合いが非常にむつかしく、一見掘りなおしが行なわれた様にも見られるが、それらの切り合い関係から、人為的な掘りなおしが行なわれたかどうかは、不明であったので、この項では、自然堆積の河川としておく。

B　溝

グリットⅢに位置するB溝は、上面に茶色粘質土が浅く堆積し、堆積土中より須恵器・土師器片（6世紀後半）の出土を見る。しかし、この段階では、全体の規模が明確につかめず、同層を除去し、全体を掘り下げることにした結果溝の規模は、確認幅5m強・深さ2m以上になることがわかった。土砂堆積状態は、A溝と大した差はないが、礫層は下層部にいたるまで見られず、砂層、砂質粘土、粘土層の順になる。溝内、1m位の深さにいたるまで遺物は、全く認められず、それより下層部において、布留式土器の出土が見られ、植物の種子、流木片も多く同様に検出した。しかし、A溝で検出した弥生式土器が全く見られないことから、古墳時代前期から後期まで続いたものであると思われる。

考　　察

七ノ坪周辺は、古くから土師式土器の出土が見られ、ことに府教委第3・5次調査時の遺物は非常に注目に値するものが認められた。それらの出土遺物は中には、少量ではあるが、弥生式土器片が見られ、周辺に弥生時代の遺構の存在が考えられたが、現在にいたるまでの間それらは、確認、検出されずにきた。今回の調査において、その先駆的資料を与えるべき弥生時代の遺構が検出でき

たのは、一つの成果である。ことに、グリッドⅣで検出した若干の遺構は、平地面での遺構存在をうながす資料となりえるものと思う。

七ノ坪周辺に弥生時代後期の集落（池上弥生集落からの分村？）の存在を想定させると同時に、それ以後の古墳時代前期から後期までの周辺遺跡・集落跡を考える上で、重要なポイントになるのではないかと考える。

（佐藤）

第4　遺　物

第8地点に於いて多量の遺物の出土を見たので、以下表にしておく。遺物番号は、実測図番号と写真番号を同一にしてある。

彌生式土器（第Ⅴ様式）

壺

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
1	器　高　不　明 口　径　21.2 胴　径　不　明	肩部以下を欠損する為、胴の形状が不明であるが、球形に近い胴に朝顔形に外反する口縁を付けたもの。口縁端は端面を形成し、上端を少しつまみあげる。 胎土は、やや粗い砂粒を多く含むが、精良なものである。淡褐色を呈し、焼成は良好だがやや軟質である。胴・頸部外面は縦ヘラシガキで仕上げる。口縁内面はくびれの位置まで横ナデ、肩部内面には指圧痕を残す。
2	器　高　不　明 口　径　〃 胴　径　19.2	頸部以上を全面的に欠損する為、全体の形状は不明。胴は最大径がやや下方にあって、腹の張った感がある。底部は空出した平底となる。くびれ部の直下に径6㎜ほどの竹管文が2個残る。 微細な砂を多く混入した精良な胎土を使用、焼成は良好で灰白色を呈する。やや軟質。外面は全面縦刷毛目で仕上げ、底部外周には指圧痕を残す。内面は肩部で横刷毛目、胴下半～底にかけて縦刷毛目で仕上げる。内面、最大径部分は横ナデのみで、刷毛目は認められない。
	器　高　24.1	所謂長頸壺。底部は体部から突出した平底で底面は少し丸くなる。

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
3	口　径　12.4 胴　径　15.5	頸部中央に径8㎜程の竹管文3個が存在するが、欠損部があるので、本来はもっと多かったものと思われる。 砂粒をごく少量含む比較的精良な胎土を使用、乳灰色を呈し、焼成は良い。内外面とも剝離が著しい為、仕上調整は不明である。
4	口　径　18.0	口縁部のみの破片、強く外反させた口縁の端部を下方に肥厚させ、その側面に刷毛目を施した後、径1cmほどの円形浮文を貼付する。浮文は3個残存。また口縁の上端部には8㎜ほどの間隔でヘラ刻みを施す。 胎土はごく少量の砂粒を含む精良なものを使用、黄灰色を呈して焼成は良いほうである。内外面とも横ナデで仕上げている。

甕

5	器　高　不明 口　径　17.4 胴　径　20.4	胴下半を欠損する為全体の形状は不明だが、イチジク形を呈して平底になるものと思われる。口縁は水平に近く外反させた後、端部を1cmほどの高さに上方へ折り上げる。 胴外面はほぼ水平のタタキ目で仕上げるが、くびれ部〜肩部にかけて、タタキ目の上に更に斜、及び横の刷毛目をかける。内面は指圧痕の上に横刷毛目を施す。肩部以下煤付着。 乳褐色を呈し、やや粗い砂粒を含む胎土を使用、焼成は良好であるが少し軟かい。
6	器　高　不明 口　径　17.3 胴径　約20.5	肩部以下を欠損する為、全体の形は不明。口縁⑤と同様に水平に近く強く外反させた後、上方へ折り上げる。端部は水平な端面を形成する。口縁部は内・外とも横ナデ、胴外面は、現存部分では刷毛目のみ残っている。内面はくびれ部の直下に横刷毛目があり、以下は指圧痕の上にナデが重なる。 砂粒を含まない精良な胎土を使用、灰白色を呈して、焼成は良好。やや軟質。
7	器　高　22.5 口　径　16.3 胴　径　20.0	最大径がやや上方にあるイチジク形の胴に、「く」の字形に外反する口縁を付ける。口縁端部は端面を形成し、浅く凹ませる。口縁内面は横刷毛、外面は横ナデで仕上げる。胴は、外面は左下りのタタキ目

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
7		を施し、内面は肩部と底部に刷毛目を見るが、中央の部分では軽いヘラケズリを施している。胴下部に接ぎ目を認める。底は完全な平底で、比較的ていねいに仕上げられている。底部の直上から口縁にかけて、全面に煤の付着を認め、特に最大径の直下部分では著しく厚く付着する。 淡灰褐色を呈し、焼成は良好で硬質、胎土は、1～2㎜ほどの砂粒を多量混入した粗いものである。
8	器　高　23.3 口　径　13.8 胴　径　20.2	平底を有するイチジク形の胴に、ごく短かい「く」の字形口縁を付けたもの。口縁の端部は外斜する端面を形成し、この部分をヘラでなでまわしている。他の部分は横ナデである。胴部は、全体に煤の付着が著しく、調整痕がはっきりしないが、肩の一分にタタキ目の痕を認める。ただし、タタキ調整後、タタキ目をナデ消ししているようである。胴内面は底部に指圧痕が残る他は、軽いヘラケズリをかけている。 茶褐色を呈し、金雲母の多く入った河内系胎土であり、焼成は良好、硬質である。
9	器　高　23.8 口　径　14.8 胴　径　19.5	最大径が比較的上方にある、肩の張った胴に、短かい「く」の字形口縁を付けるもの。肩の線が直線的であることと、口縁がかなり小振りに作られていることが目立つ。底部はかすかに凹んだ平底で、周囲に指圧痕が残る。 口縁は内・外面とも横ナデで仕上げられ、先端は少し丸味を帯びているが端面を形成する。胴は内面は指圧痕を残したままで、外面はタタキ目で仕上げるが、部位によってタタキ目の方向が異なる。また、肩部の上方はタタキ目の上から横ナデを施している。 灰白色を呈し、焼成は良好で硬質、胎土は粗い砂粒を多量含むものを使用している。また、くびれ部以下、底部まで煤が付着する。
10	器高約18.0 口　径　16.5 胴　径　14.6	胴径よりも口径の大きい小型甕である。口縁は「く」の字形に外反するもので、端面を形成し、刷毛でなでている。口縁の成形は所謂たたき出しによったもので、内外とも横ナデ、くびれの上方までタタキ目が残っている。胴部は、全面に少こし左下りのタタキ目を施す。内面は横ナデの上に細かい刷毛をかけている。底部は平底であるが、欠

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
		損する為、底面の形状まではわからない。細砂及びやや粗い砂粒を含む胎土を使用、灰褐色を呈し焼成は良好で比較的硬い。
11	器　高　不明 口　径　14.8 胴　径　不明	肩部以下の形状は不明。口縁は「く」の字形に外反するもので、端部を上方につまみあげている。口縁の調整は内外とも横ナデ、胴外面は左下がりのタタキ目で仕上げ、内面は指圧痕の上をヘラ様のもので軽く削っているが凹凸が著しい。 粗砂粒のやや多い胎土を使用、灰褐色を呈して焼成は良く、比較的硬い。

高杯

12	器　高　16.1 口　径　19.5 底　径　12.1 脚部高　7.9	径に対して比較的深い杯部を有し、脚の形状は柱部から裾部への移向の漸移的なものである。脚には円孔を3個穿つ。柱部内面に指圧痕を残し、裾部内面が横ナデとなる他、外全面、及び杯部内面は全てヘラミガキで仕上げられる。杯部内面のヘラミガキは、放射状に施されている。脚柱部の上方にはシボリ目が残る。 細砂を多く含む精良な胎土を使用、黄灰色を呈する。焼成は良好だがいくぶん軟質である。
13	器　高 口　径 底　径 脚部高	部は口縁の外反がほとんどなく、やや深いもので、脚部は、柱部と裾部が明瞭に分かれる。脚裾部には、小円孔5個を垂直に穿っている。全体に器表剝離が進んでいる為、調整痕が明瞭でなく、脚柱部にヘラミガキが認められるのみである。 脚の形状はシボリ技法によったものと思われるが、これも剝離が著しい為、明瞭な痕跡は残さない。 比較的粗い砂粒を多く含む胎土を使用、乳灰色を呈する。焼成は良い方だが軟質である。
14	口　径　24.0 脚部高 約 7.0	径に対して浅い杯部を持つ。口縁は明瞭に屈曲した後、軽く外反する。この屈曲部から口縁内面にかけて横ナデを施すが、他の部分は内外ともヘラミガキで仕上げる。脚部は欠損の為、不明。 細砂を多く含むが、やや粗い砂粒も少量入る胎土を使用、灰褐色を呈する。焼成は良好で、比較的硬い。

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
15	底　径　12.5	13の脚部とほぼ同形状の高不脚である。柱部径は3.9cmほどあって、13よりやや太い。裾端部は外上方へつまみあげた肥厚があり、孔は5個をかぞえる。柱部、裾部とも外面はヘラミガキを施し、内面裾部は横ナデを施す。柱部内面の調整は不明。
16	底　径　16.0 脚部高　10.4	柱部と裾部の区別のない、所謂ラッパ状に開く高不脚部である。裾端部は少し外上方につまみあげていて、中央の高さと裾寄りの位置に、各5個の円孔を2段に穿つ。上段円形より下には、縦に櫛目様の粗い刷毛目を施し、裾部内面に指圧痕を認める他は、剝離が進んでいる為、調整痕が残らない。 粗砂粒を多く含む胎土を使用、赤褐色を呈して、焼成は良好だが軟質である。

鉢

17	器　高　13.8 口　径　23.0	体部のふくらみがほとんどなく、底～口縁にかけての線が直線的なもので、口縁は「く」の字形に外反させる。 体部、口縁とも、内外全面を横ナデで仕上げて、内底部と底部外周には指圧痕が残る。底部は側端がやや外反ぎみのもので、底面はかすかにあげ底ぎみである。細礫（5～6m/m）をごく少量含む他、細砂のみ多く混じる胎土を使用、茶褐色を呈して焼成は良好であるが、やや軟質。外面のほぼ全部にわたって煤が付着し、口縁～体部の中位までは特に著しい。

蓋

18	器　高　3.8 口　径　12.6	つまみの側端は反転がほとんどなく、上面は浅く凹む。全体に粗雑な整形で、指圧痕の上を軽くなでて仕上げるだけである。粗砂粒を少し含む胎土を使用、色調は所謂肌色に近く、硬い。口縁の周囲に煤の付着がある。

土師式土器

甕

19	器　高　不　明 口　径　15.2 胴　径　22.2	やや上下に長い球形の胴に、「く」の字形に外反する口縁を付ける。口縁端は内側に肥厚させ、その上面はほぼ水平な端面を形成する。口縁は内・外面とも横ナデで仕上げ、胴部外面は全面刷毛目を施す。内

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
		面はていねいなヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。淡褐色を呈し、焼成は良好、胎土は1㎜以下の砂粒を多く含むもので、硬く焼きあがっている。 肩部に櫛刺突文4個がある。
20	器　高　不明 口　径　14.0 胴　径　不明	肩部以下を欠損する為、胴の形状は不明だが、ほぼ19と同様のものであろう。口縁の側面観は19に似るが、端部の肥厚が少し下方に付いていて、その上方は内傾した浅い凹面を成す。仕上げ調整は19と同様で、器壁はヘラケズリで薄く仕上げる。色調は19よりいくぶん赤味が強い他、胎土・焼成ともに、1に共通する。 本例では、口縁～体部の残存部分全面にわたって、黒色の塗付物が認められる。明らかに煤ではないもので、若干の光沢を持つ。黒ウルシの様にも見えるが、分析を行なっていないので成分は明らかでない。なお、肩部には櫛刺突文4個が残っている。
21	器　高　不明 口　径　13.8 胴　径　18.7	体部は下半部を欠くが、3と同じく球形に近いものである。口縁はくの字形のものであるが、くびれ直上のふくらみがほとんど消えて、側面観が直線的になっている。端部は内上方に向って肥厚させる。口縁は外面を横ナデ、内面を刷毛目の上から横ナデで仕上ている。胴外面は刷毛目、内面はヘラケズリで仕上げ、肩の少し下方から以下に煤が付着する。色調、胎土、焼成とも3にほぼ共通している。
22	器　高　不明 口　径　16.6 胴　径　21.8	体部下半の形状が不明だが、19・20より更に球形に近いものと思われる。口縁の形状は上記の例と大差ないが肥厚の上方は内傾する平担面となる。口縁は内外とも横ナデ、胴外面は刷毛目で仕上げるが、磨耗の為、部分的に残るのみである。胴部の内面はヘラケズリを施し器壁を薄く仕上げる。 色調は乳黄褐色、部分的に乳赤色を呈し、1㎜以下の砂粒を多く含む胎土を使用している。焼成は良好、硬く焼き上がる。
23	器　高　不明 口　径　14.3 胴　径　不明	本来は球形乃至長球形らしい胴に、所謂複合口縁を付けたものである。口縁は屈曲部以上が少し外に開き、先端を軽く外反させる。屈曲部の外側は、ややつまみ出しぎみに、外下方へ肥厚させている。口縁の内・外面から肩部上方にかけて横ナデで仕上げ、以下は全て刷毛目

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
24 25	口　径　11.2 口　径　12.9	を施す。胴の内面はヘラケズリを施し、器壁を薄く仕上げる。1㎜以下の砂粒を多く含む胎土を使用、灰褐色を呈して焼成は良好、硬質である。 以上の他に、比較的小型の、口縁破片がある。いずれもくの字口縁で、端部の肥厚がなく、側面観は、いくぶん直線的なものである。いずれも横ナデで仕上げる。24は乳黄褐色で、25は淡褐色を呈し、胎土、焼成は24に共通している。

壺

26		複合口縁壺の頸部の破片で、口縁及び肩部以下の形状は不明。頸部及び肩部は、肩部内面を除き、全てヘラミガキを施す。肩部の内面には、シボリ目が残っている。口縁の口曲部より上は横ナデを施す。 乳褐色を呈し、微細な砂粒を多く含む胎土を使用、焼成は良好で、硬い。

高杯

27	口　径　20.0 底　径　11.3 脚部高　5.2 器　高　16.2	杯部は、底と口縁の境の比較的明瞭なもので、口縁は大きく開くが、ほとんど反転しない。端部は丸くおさめる。脚部は、柱部と裾部の区別のはっきりしたもので、器高に対し、柱部がかなり長い。杯部の内面は横刷毛の上に放射状にヘラミガキを施し、外面は横ナデで仕上げるが、その下に、部分的に刷毛目が残る。脚は、外全面～裾内面に刷毛目を施すが、裾内面の刷毛目は横ナデで大部分消されている。 色調は乳赤褐色、裾の一部に黒斑がある。0.5㎜ほどの砂粒ごく少量を含む胎土を使用、焼成は良好で、硬く仕上がる。
28		脚柱部のみ残って、裾部、杯部口縁は全て欠損する。柱部はエンタシスぎみで細長く、内面にシボリ目が残る。外面はヘラケズリを施す。裾部には、対様位置に2ヶ所の円孔を穿つ。 赤褐色を呈し、1㎜大の砂粒を多く含む胎土を使用、焼成はやや甘く、軟質で　い。

坩

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
29	口　径　9.5 口縁高　3.8	複元しうる胴部の大きさに対し、口縁が異常に大きい。口縁の内面には、部分的に細かい刷毛目、刷毛先のあたりが残る他は全て横のヘラミガキを施す。外面は横ヘラミガキで仕上げるが、口縁端部の外周は横ナデのままである。色調は褐色～乳褐色を呈し、胎土・焼成は2に共通する。
30	口　径　6.6 口縁高　2.5	かなり小型の坩で、胴は欠損して不明だが、口径より明らかに小さなものである。口径内面は横ナデの上を横ヘラミガキで仕上げ、外面は横ナデのみにとどめる。乳赤褐色を呈して、非常に精良な胎土を使用、焼成は良く、硬い。
31	口　径　11.1 胴　径　8.2 器　高　8.1 口縁高　3.6	やや扁平な球形の胴に、大きく開いた口縁が付く。胴径よりも口径が大きい。口縁の内・外面から胴の最大径部にかけて横のヘラミガキを施す。胴内面は剝離の為調整痕が残らない。底部は①ヘラケズリ（水平、及び径方向）②径方向ヘラナデ、③渦状ヘラミガキの順に調整している。非常に精良な胎土を使用、橙褐色を呈して、焼成は良いが、やや軟質。 所謂<坩>の器形のものである。

小型鉢

32	口　径　13.4 器　高約5.0	扁平な半球形の体部に複合口縁状の、屈曲する口縁の付くもの。全体に薄い作りである。 口縁の内・外面は横ナデ、体部はヘラケズリの上から横のヘラミガキを施す。体部内面はていねいになでて仕上げる。0.5㎜以下の砂粒をごく少量含む胎土を使用、褐色を呈して、焼成は良く、硬い。口縁外周～内に煤付着。
33	口　径　16.0 器　高　4.4	全体の形状は、32に等しいが、体部がかなり扁平である。器壁も32よりは厚い。口縁は内・外面とも横ナデ、体部内面は放射状ヘラミガキを施し、外面はヘラケズリの上を横ヘラミガキで仕上げる。 底～口縁下部に煤付着。

小型丸底壺

遺物番号	法　量（cm）	特　　徴
34	口　径　不明 胴　径　9.4 器　高　不明 体部高　7.3	口縁は欠損して不明だが、「く」の字口縁であろう。外面の肩部下方以下を全て、粗雑なヘラケズリで仕上げ、器表の凹凸が著しい。肩部内面には刷毛目を残す。底部の内面にはヘラ先のあたりが残っている。 灰白色を呈して、細砂を多く含む胎土を使用、焼成は良く、比較的硬い。
35	口　径　9.2 胴　径　8.8 器　高　7.5 口縁高　1.9	球形の胴に短かい「く」の字口縁を付けるもの。口縁端部は内側に、かすかにふくらむ。口縁は内・外面とも横ナデ、体部外面は刷毛目を施し、内面はヘラケズリにする。底部の直上から口縁外面にかけて煤が付着する。 胎土は砂粒の多い、比較的粗雑なものを使用、灰褐色を呈して、焼成は良いが少し軟質。

須　恵　器

高杯

36	口　径　11.3 底　径　10.2 器　高　9.8 脚部高　5.0	有蓋高杯で、杯部は普通の蓋　を使用するもの。脚は短脚、1段のもので、三角形の透しを三方に穿つ。 杯部口縁端は内側に段を形成し、全体にシャープな作りである。ロクロ方向は左回転。 色調は灰色で、胎土は細砂を多く含む、ごく普通のもの、焼成は良く、硬質。

（　森　）

ま　と　め

今年度の発掘調査は、住宅建設に先立つ緊急発掘調査である。第１地点は遺跡のほぼ南限を示し、第２・７地点は北限を示す。遺物（土師器・須恵器）の散布は認められるが、遺構は存在しなかった。第８地点に於いて、弥生式土器（第Ⅴ様式）土師器が出土し、弥生時代の溝も検出された。この地点の南側約５０ｍの所で、古墳時代初期の竪穴式住居址及び方形周溝墓が発見されており、半径約５０ｍの範囲に小さな集落があったと思われる。第３・４・５・６地点に於いては、若干の遺物（土師器・須恵器）の出土が見られたが、遺構は確認されなかった。第４・５・６地点の東側約１００ｍと南西側１００～１５０ｍの部分で住居址が発見されている。これらの結果から、豊中遺跡はその範囲全体に遺構（集落）が存在していたとは考えがたく、小さなまとまり（それは数軒単位の住居のまとまりか）を持って、それらがいくつか集まって豊中遺跡を構成しているようである。第２・７・８地点は七ノ坪遺跡とも呼ばれているが、豊中遺跡の性格からして、それも豊中遺跡の中へ含めてもよいように思われる。その時期は弥生時代後期の土器の形態を引き継ぐ土師器の時期から中世まで続くものである。第８地点で弥生式土器が出土したことは既に述べたが、この地点より北東約５００ｍ離れた所に、池上、曽根遺跡と呼ばれる弥生時代全時期にわたる大集落遺跡が存在する。弥生時代後期に、この集落の分村として第８地点の付近に集落が営なまれたのであろうか。今後の資料の追加を持つところである。以上が今年度の調査で確認しえたところのこととして報告しておく。

参　考　文　献

① 大阪府教育委員会　石神　　氏よりご教示

② 〃　井藤　徹氏よりご教示

③ 「豊中・古池遺跡」発掘調査概報　その１.　１９７３　豊中･古池遺跡調査会

④ 「　〃　」　〃　その２.　１９７４　〃

⑤ 「　〃　」　〃　その３.　１９７６　〃

⑤　「和泉市史」第一巻　１９６５　和泉市史編纂委員会

⑥　大阪府教育委員会　中村　浩氏よりご教示

⑦　②と同じ

⑧　②と同じ

⑨　「豊中・古池遺跡」発掘調査概報　その３　１９７６　豊中・古池遺跡調査会

⑩　「節・香・仙」第２２号　１９７２　大阪府教育委員会文化財保護課

⑪　「池上・四ツ池」　１９７０　第二阪和国道内遺跡調査会

「第二阪和国道内遺跡調査報告書」4　１９７１　〃

「　〃　」1.2.3　１９７３　〃

「四ツ池・池上遺跡発掘調査概要」１９７１　大阪府教育委員会

「池上遺跡発掘調査概要Ⅱ」　１９７３　〃

「　Ⅲ」　１９７４　〃

⑫　「和泉の古代遺跡」古泉考古学第5号１９６１　大阪府立泉大津高等学校地歴部

⑬　「七ノ坪遺跡発掘調査概要」　１９６９　大阪府立教育委員会

「　〃　」　１９７４　〃

「七ノ坪遺跡試掘調査報告」　１９７４　大阪府立泉大津高等学校地歴部

「七ノ坪遺跡発掘調査概要」　１９７４　泉大津市教育委員会

布留式土器に関する一考察

－型式編年における概念－

佐藤　正則

現在、非常に多くの土師式土器を出土する遺跡が見られているが、それらの中で今まで行われて来た事は、遺跡・遺物を中心とし、その中での型式編年を追求する形でしかなかった。これは、土器が出現して以来このような情況での型式編年であるが為に、狭義の意味の中での遺物編年で、その中における流通・地域性などは、あまり考えられない状態であったと言えよう。ここで言う土師器、特に布留式土器においても同様である。現在、種々の編年が行われているが、西日本一帯に分布し、多くの同種、又、類似する器種が見られ、出現地のつかみにくいものである。例えば、大阪で出土する土師器の中に、中国地方の酒津・欠山式などが出土し、それらとの関係を求める為に、型式を言い切るのは問題であるが、はたして、出土した遺物が、それら遺跡出土土器と同種なのかと言えばそうではなく、類似しているだけである。外から見るとそうではなく、それらは類似するのみで終っていて、近いものとしか言えないものを、はたして、外からの搬入品であるのか、搬入による独自変化を遂げたものなのか、それすら把握できずに、○○式というように視点をぼかしつつ、独自で編年を行っている現在の型式編年に問題が生じるものである。

現在、布留式土器に多くの型式編年が与えられつつあるが、それらは地域性を無視した中での編年であると考えられる。例えば、小若江Ⅰ式（北式）の土師器を標式として取り上げ、それを中心とした型式編年であったことは言うまでもなかろう。しかし、これを標式として取り上げた中には、地域性が考えられてはいないのではなかろうか。元来、布留式土器とともに出土したタタキ目・平底土器は、あまり問題にされず、二次的堆積と見られていたし、見られがちであった。しかしそうではなく、同時に存在したことを裏付けるものであろう。これなどは、※田中琢氏が布留式以前で書いた、庄内式期に入ると平底土器が消滅するといったことを否定する資料となり、地域性を考える上で重要な点

である。弥生第Ⅴ様式より続き存在するこれらの土器は、地域性を持った個有のものであると考えてはどうだろうか。土器の生産→消費を考える上で重要な点でもあり、在地生産があるとする第Ⅴ様式系の土器は、たとえ上田町Ⅱ式・布留式土器の搬入があったとしても、本格的に在地生産が行われるまでは、旧来の土器生産が行われていたことを裏付け、型式を考える上で重要なポイントになることを感じ、又、問題にした所である。それとともに、小若江北式より古い段階の土師器の出土を見たことも書する。

庄内式期と、小若江北式との間に一つの空白的プロセスがあると考えられていた。それは現在に至るまで型式として取り上げることができなかった。上田町Ⅱ式土器の消滅にとって変わるのが布留式土器であるが、それらはあまりにも単時間のうちに切り替り、小若江北式では同種の器形の存在を見ない。ある地域（ここでは和泉に限定する）では、小若江北式に見られるような器台を中心とする小型三種土器の形態を見ると、同式の中の器台などは、新しい様相を持つものであることがわかる。

泉大津豊中遺跡出土の器台は、上田町Ⅱ式・第Ⅴ様式系土器とともに見られるものである。器形的には、小若江北式とは全く坏部が異なり、むしろ、七ノ坪遺跡出土のものと同器形である。これは器台に限らず、甕においても同様のことが言えよう。現在、古い段階を示す一つのメルクマールとして、口縁端部、体部整形の変化を見ることで言っておられる諸先生方は、それらの中に含まれている地域性を無視した器形のみの観察であり、それらを取りまとめることによる型式編年をされるが上に、多くの問題をかかえることになると言えよう。本来、編年の中心である土層、それにともなう器形・器種変化などは、一定地において考えることが重要であるが、そのような資料を得ることもなく、前項に書したようなことで、言葉を濁すようなことを行っているのが現状である。広義の意味での編年をする上においては、それで良いのかも知れないが、地域を無視した編年では何らの与えるべくもなく、矛盾したものであることを認識する必要があるのではないか。ことに、ここで述べた土師器の編年においては、それらの体質を浮き彫りにしたものであると言える。数多くの問題を提起しつ

つ、編年過程を見透して行く中で、言い切り、又、限定するのは、基礎的な資料問題ではなく、資料を得てからの編年であって良いと考える。

これらを踏まえた上での編年をここで行う。

－庄内式期－

和泉系土器（第Ⅴ様式系）を中心とし、上田町Ⅱ式甕をともなう時期にあてはめるものとする。しかし、上田町Ⅱ式甕の搬入が見られなくとも、第Ⅴ様式土器に若干の変化が見られ、又、退化したものを、土師器と呼べるかどうかは問題である。※酒井龍一氏は、これを伝統的第Ⅴ様式と言っておられるが、それは様式において矛盾するものであり、本来様式を述べる場合には、伝統的という言葉は存在しないものと言えよう。彼は、第Ⅵ様式であるとは言い切れずに、伝統的ということにより言葉を濁しているように思える。しかし、都出比呂志氏が島本町史で呼んだ、「庄内式を第Ⅵ様式と呼ぼう」としたことは、（庄内式－上田町Ⅱ式を指す）新たな問題提起である。彼の言う第Ⅵ様式内には、上田町Ⅱ式を含んだもので、いわゆる布留式土器出現前の全器種を指すものと考える。器形、整形技法の異なった、それを含めて言うのは、土師器としての出現器形（上田町Ⅱ式甕）の存在を問われるものであろう。もし、それらを含めて様式を述べた場合、布留式土器と共伴する。それら前段階土器の存在を考えない、一つの誤認としか言いようがない。単に器種消滅を布留式前と考えるならば、広義での第Ⅵ様式と仮称しても問題はないが、布留式期においても、これらの前段階の器種が見られ、又共伴している現在において、第六様式を提唱しょうとするのは、布留式期の初現を後退させるものであろう。これは、小若江式を標式として考え、前段階の系譜を限定させようとするものなのかという問題提起でもある。この頃で庄内期と言ったのは、上田町Ⅱ式甕を対照物として言うことにするが、和泉においても又地域的な差が見られるかも知れず、同種の器形が出現しないことも考えねばならない。

田中琢氏の言った庄内期、つまり上田町Ⅱ式を一つのメルクマールとし、平底・タタキ目のある器種の消滅が見られると言っているが、それは地域による

変遷過程内で見られることであり、上田町Ⅱ式の影響を受けつつも弥生第Ⅴ様式系の土器も作られ、それらは平底・タタキ目を用いている。和泉において、平底・タタキ目の消滅は認められないし、他の地域においても同様のことが言えるであろう。それは、搬入品と認められ明らかにされているのが上田町Ⅱ式甕であり、他の器種において胎土的にも、テクニックにおいても、和泉系の第Ⅴ様式の系統を引くものである為に、搬入品とは認められない。しかし、中には器種の違った物が多数出現することがあり、その場合明らかにそれと分る場合においてのみ搬入品、又は、それなりのテクニックを有した工人の流入があったものであると考えられよう。したがって和泉で庄内期を形成する土器は、上田町Ⅱ式甕・弥生第五様式系の土器、装飾土器などである。

－布留式期－

前項で述べた小若江北式を標式としている布留式土器は、その型式に前後するものであることは言うまでもない。しかし、地域的な特徴をとらえず、純粋種などと言うのは問題である。和泉において、同時期と思われる（小若江北と同器種を出土）遺跡遺物の中に、タタキ目・平底の土器（甕）が含まれていることを考えなければならず、単に一地域からの単独出土だけでは片づけられないものであることを認識する必要がある。というのは、多くの布留式土器が出土する中で、第Ⅴ様式系の器形、又テクニックを引き継ぐものが出土することである。それらをいかに考えるかにより、在地の伝統的な存在がうかがえ、土器生産による生産・消費→搬出・搬入→消費する共同体成員が、日常、常に必要とした、物に変わる器種をつかむことにより明確にされるのであるが量的問題を考えず、それらの器種切り換えが早く行なわれることはなく、例え大量の搬入があったとしても、それらは一度に消滅するものではないのである。もし小若江北のような遺跡が数多く見つかれば別であるが、現在、自らが確認する中において、純粋種などと言われるものはほとんどなく、それらのすべてに、在地のテクニックを有した平底土器が含まれていることを、見逃してはならない。現在に至る布留式土器と共に出土したと思われる、同種の土器は、二次的

堆積と見られがちであったことを思うと、それらの存在をもう一度考え直す必要に迫られるのではないか。そして又、純粋種なるものが出現したとしても、地域による差か、出土遺物単一化なのかを、それだけの物を取り上げて言うのではなく、広義の意味を持っての分類が求められ、地域性を憂慮しなければならないと考える。

これら多くの型式分類の中で見られることは、整形状態である。これなどは、古い段階であっても新しい段階であっても、変化はあまり見られず、粗雑化するか、簡略化の傾向にあると見る。これは6世紀前までの土師器にも若干見られるものである。これらを踏まえた上での型式編年であることを認識した上で、自らが、調査に携わり、又土師式土器を出土する遺跡群を追いかけ、それぞれの器種・器形・テクニックの変化を求めつつ、古い段階の物から新しい時期の物までの変遷を追いかけることにするが、これは、地域性を憂慮した和泉に限るものである。

七ノ坪遺跡を中心として、布留式土器を出土する諸遺跡が位置する。豊中・曽根・伯太北・古池・上池などであるが、これらの他にもいくつか存在する。これらの遺跡遺物を利用し、土器型式編年・変遷を行なうものである。まず、これらの中で古いと思われ、又布留式土器が現われ、小型三種土器がセットとして最も最適とする七ノ坪遺跡、第3・5次出土遺物を取り上げた。これから出土した遺物は、小若江北式に先行する時期に値するものと考え、ここに七ノ坪式を提唱しょうとするものである。

注

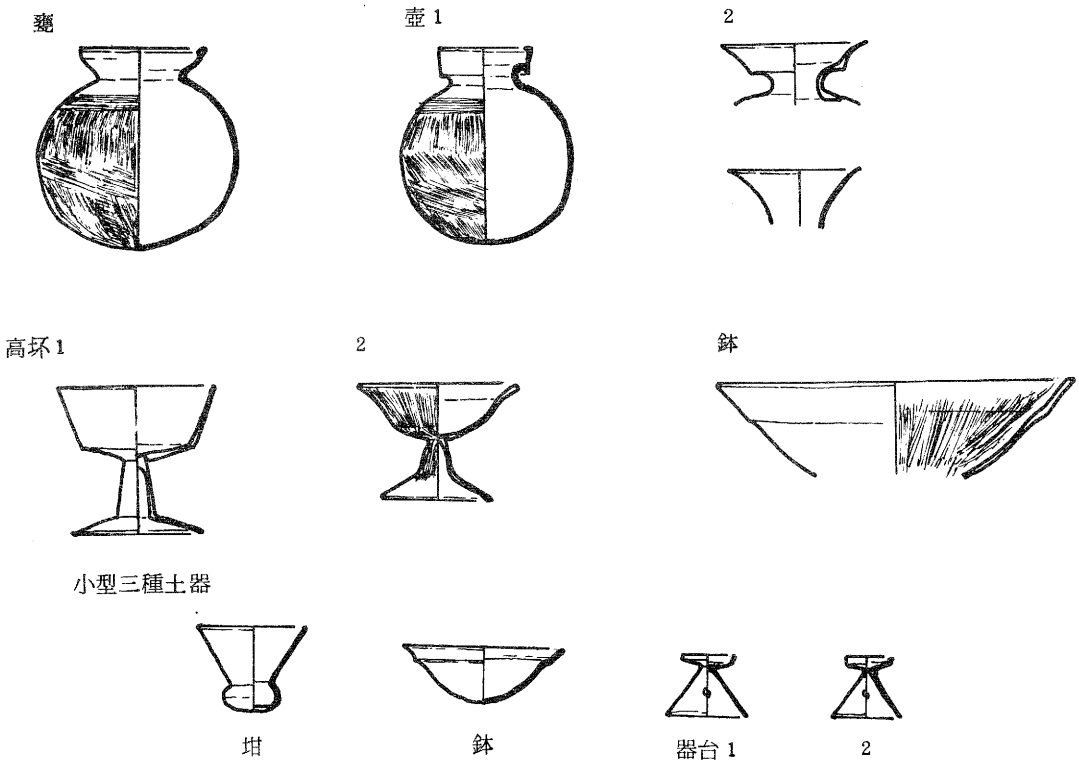
第Ⅴ様式系とするのは、第Ⅵ様式を設定するのに多くの問題を含み、また、伝統的という様式を述べることは、時間幅を考えてのことではあるが、本文中で述べた様に、様式を述べた場合には、伝統的という様式は存在せず、それらのことがらを考えて第Ⅴ様式系、また、在地系とするのが適当であると考え使

用した。

本項は、発掘調査・整理による私見を述べただけで、誤りを犯していることもあるので、多数の御意見・批判を述べていただければ幸いです。

なお、本項の文章表出・校正は、藤田雅子氏によるものである。

七ノ坪式略図



1. 「布留式以前」 田 中 琢 考古学研究 第12巻 第2号

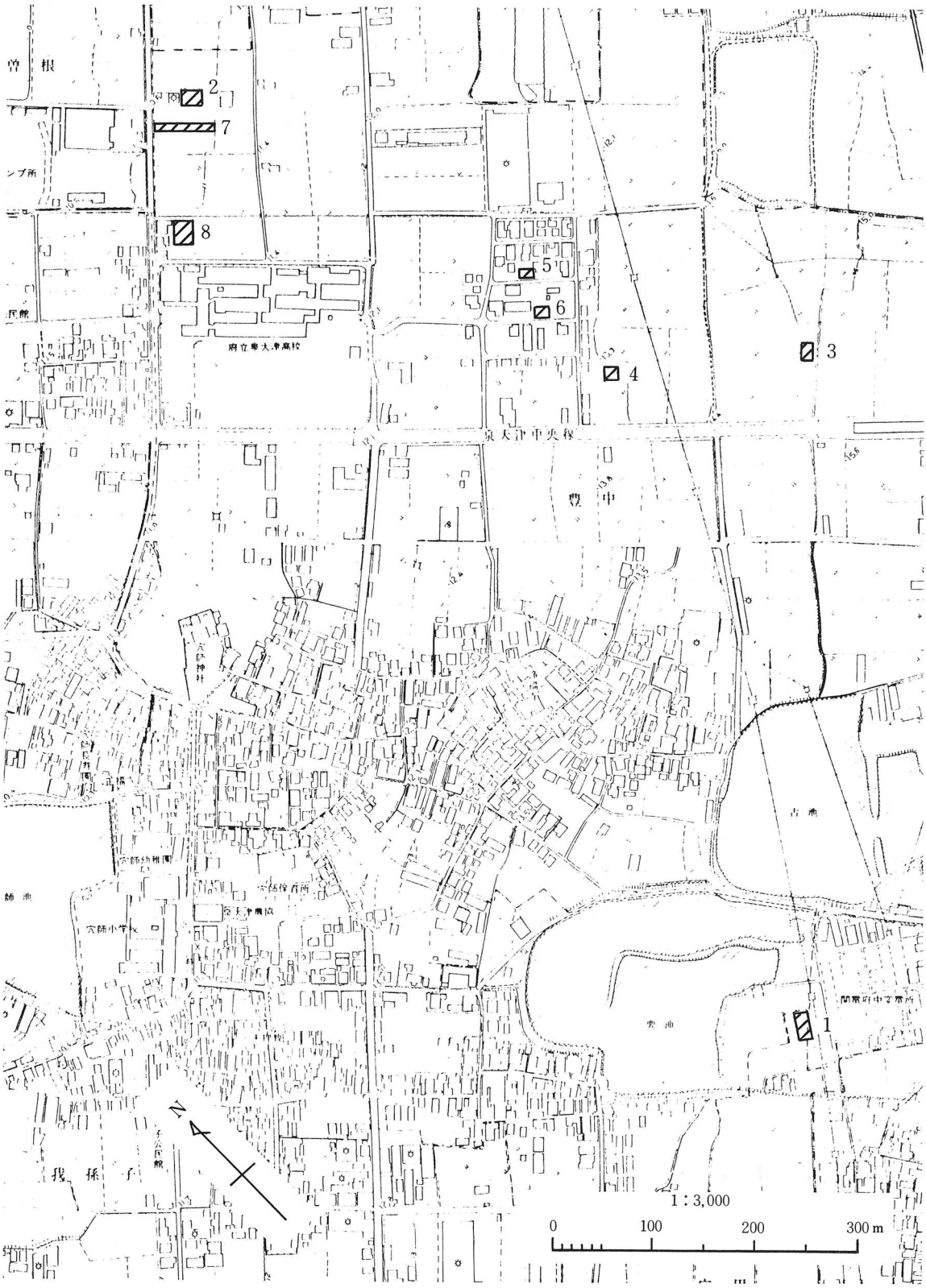
1. 「大阪府松原市上田町遺跡の調査」 原 口 正 三
「大阪府立島上高校研究紀要」 3所収

1. 河内考古学 2.
「小若江遺跡出土遺物」 河内考古学研究会

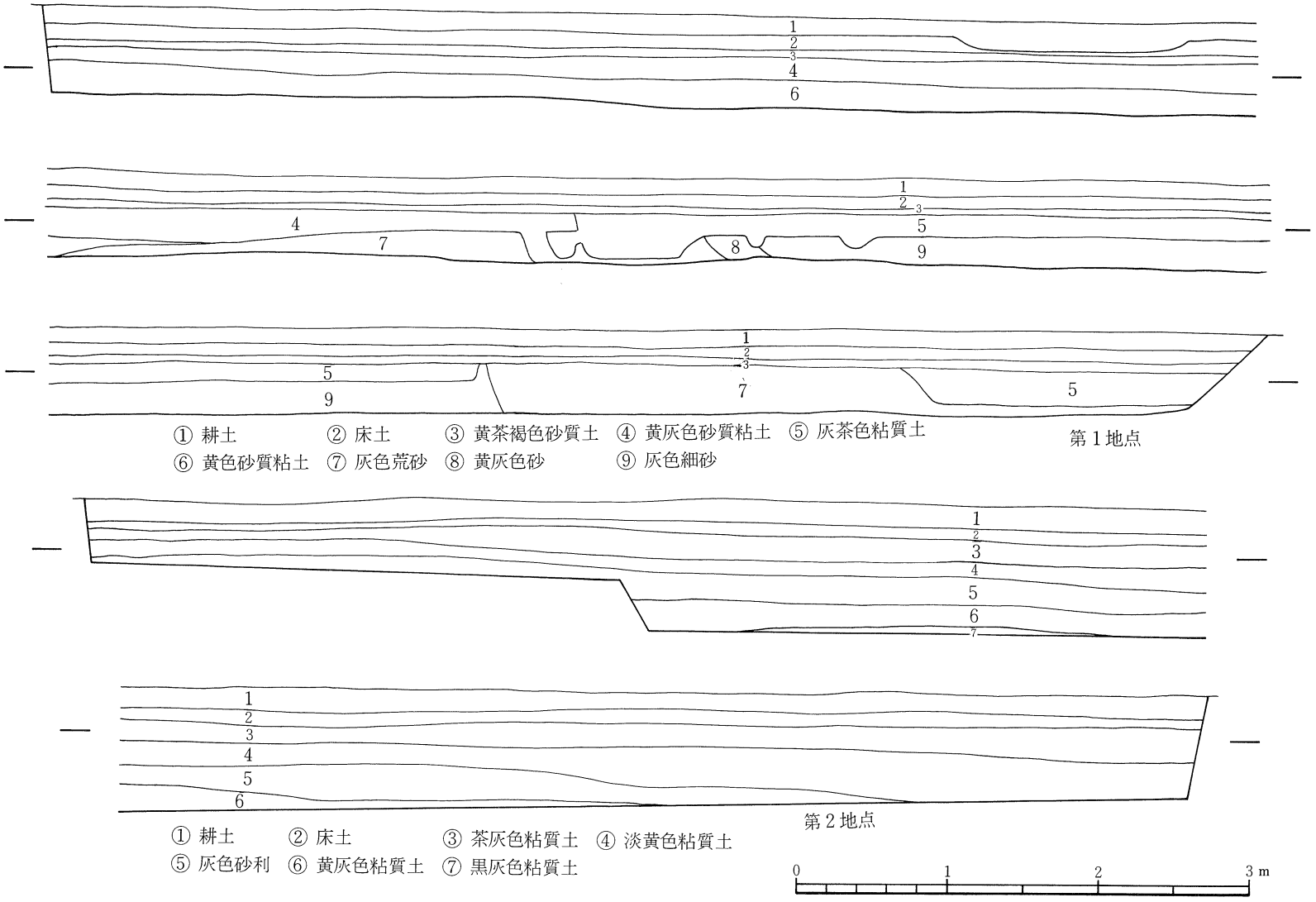
1. 上田町遺跡発掘調査概要 和泉市教育委員会

図　　版

図版第一

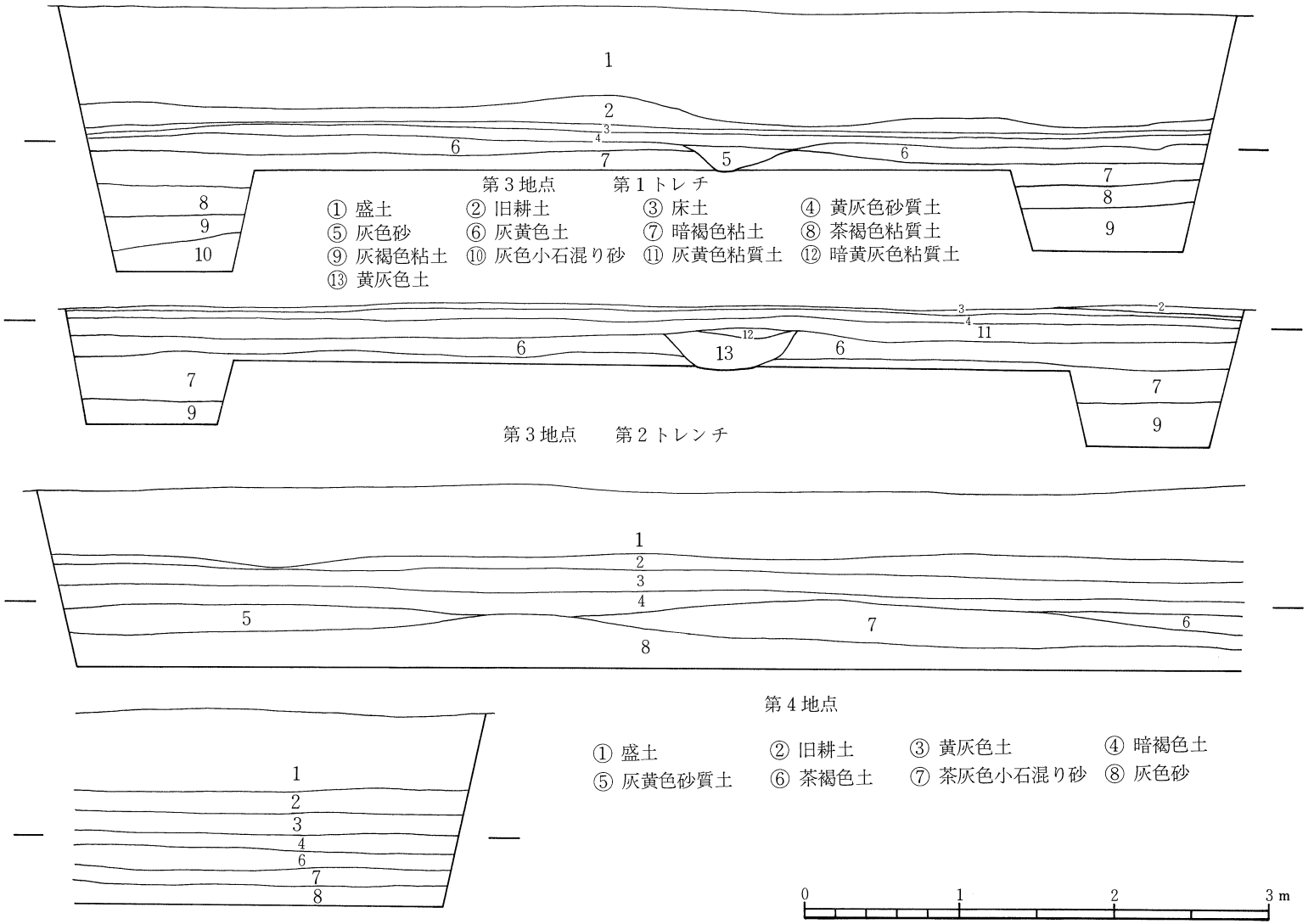

曽根
2
7
8
5
6
3
4
府立泉大津高校
泉大津中央線
豊中
六師神社
六師幼稚園
六師保育所
泉大津病院
六師小学校
吉池
1
我孫子
N
1：3,000
0
100
200
300 m

調査地点



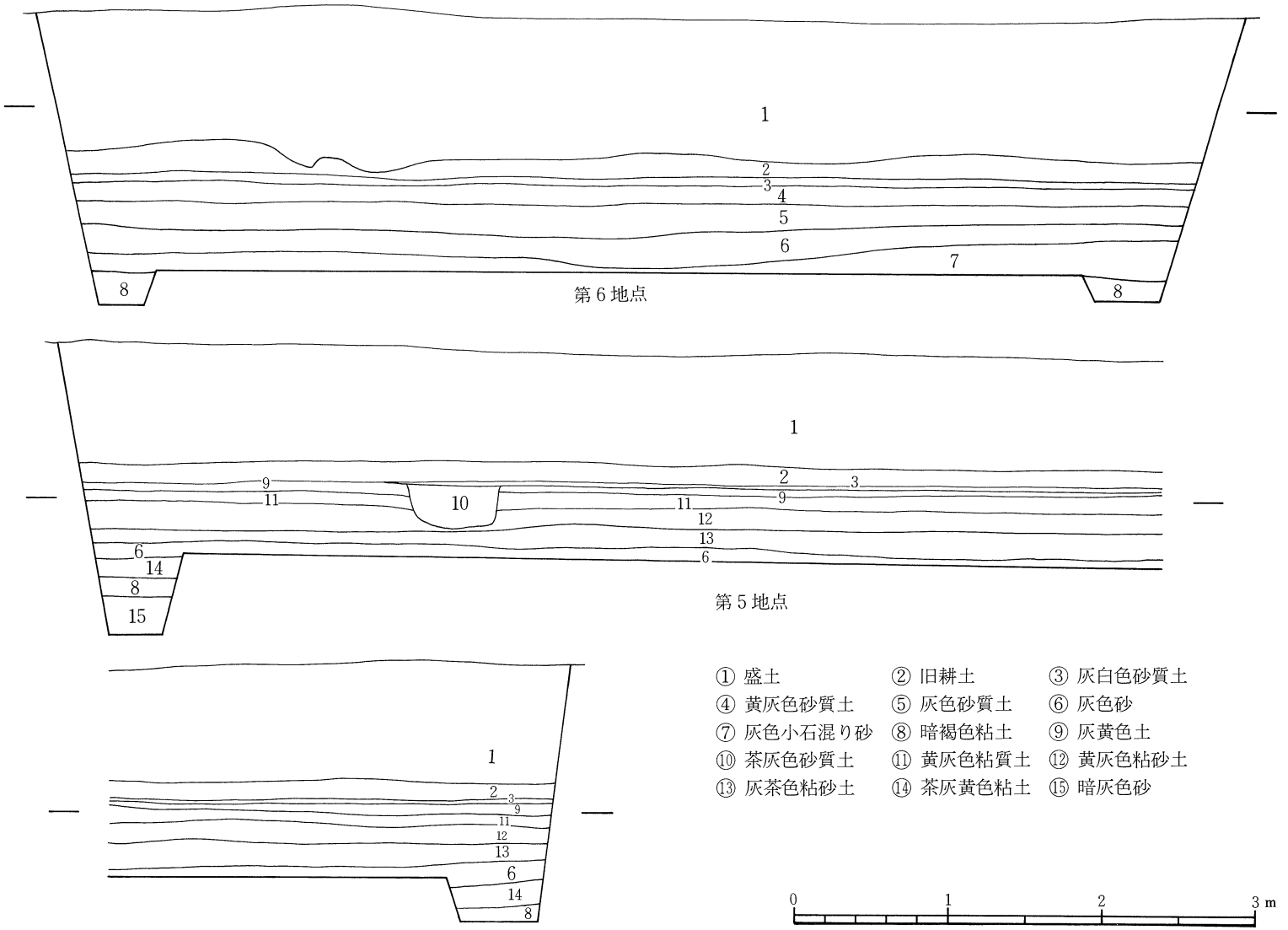
第1，第2地点断面図

図版第一



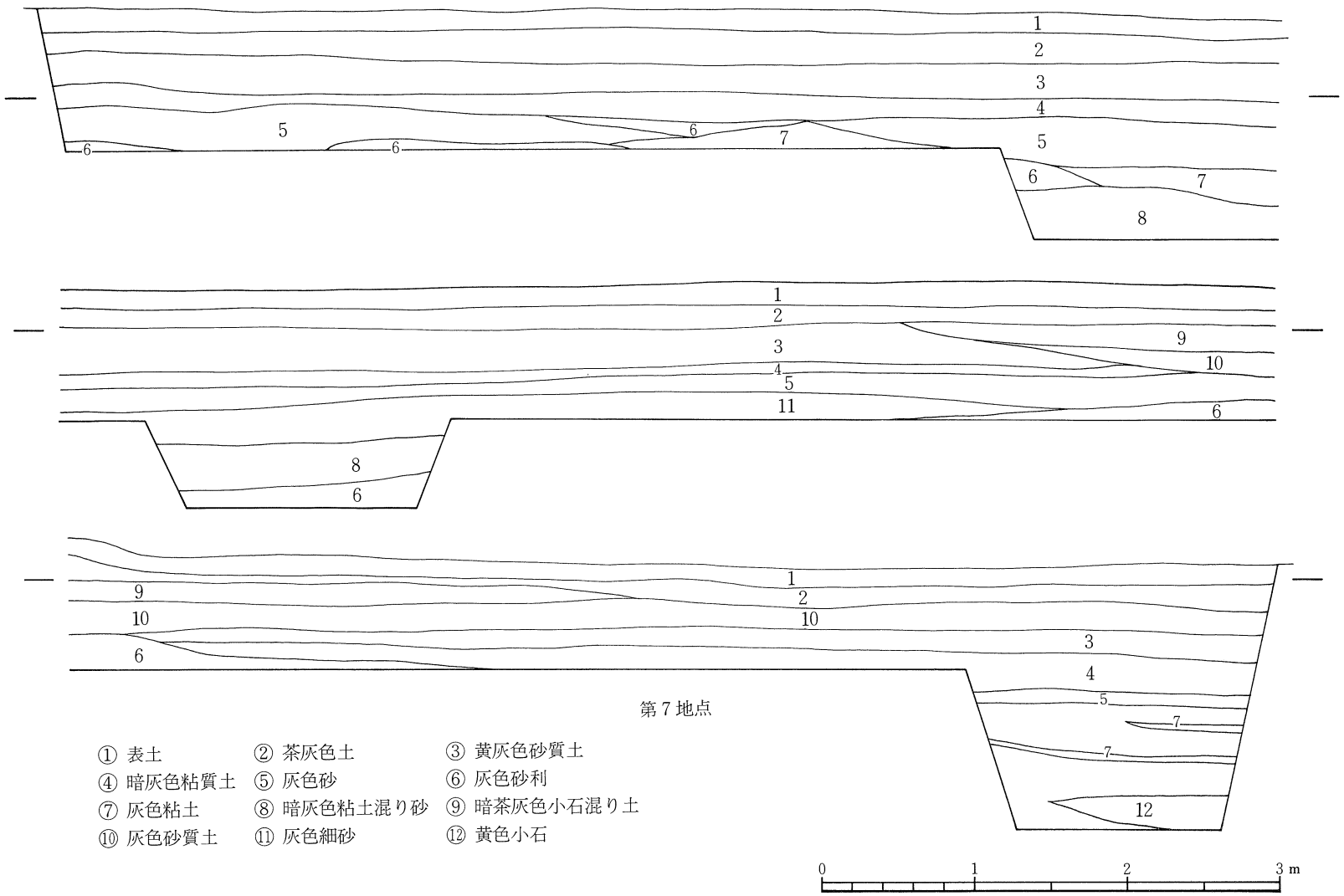
第３，第４地点断面図

図版第二



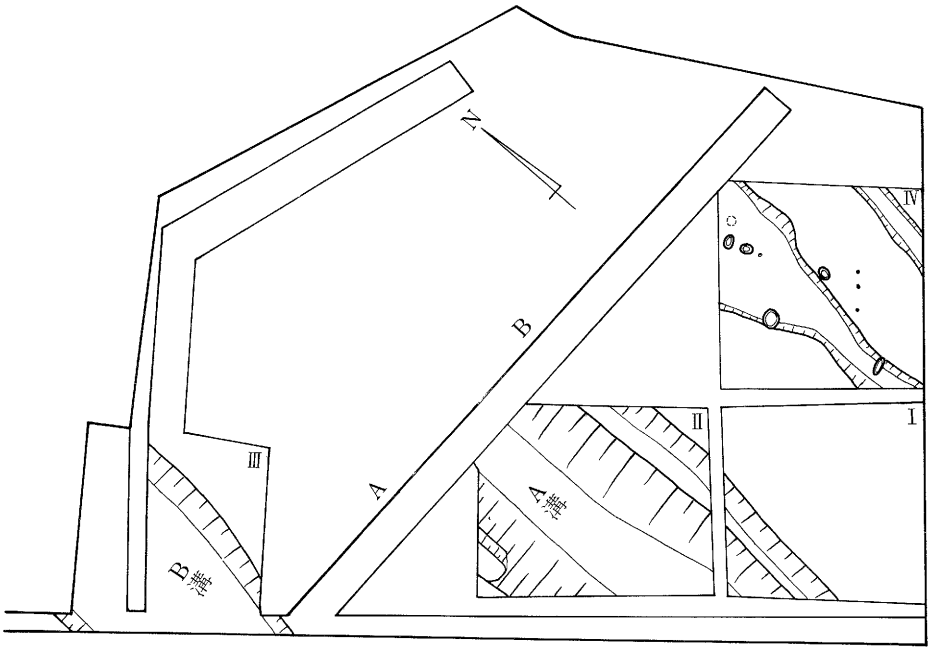
第５，第６地点断面図

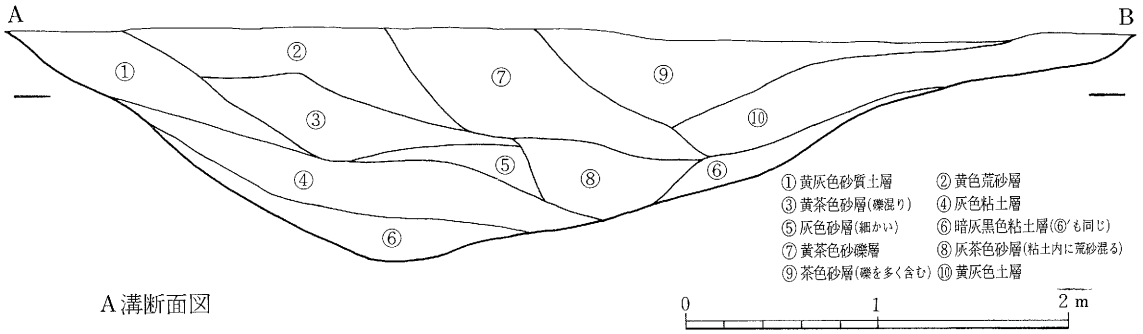
図版第四



第７地点断面図

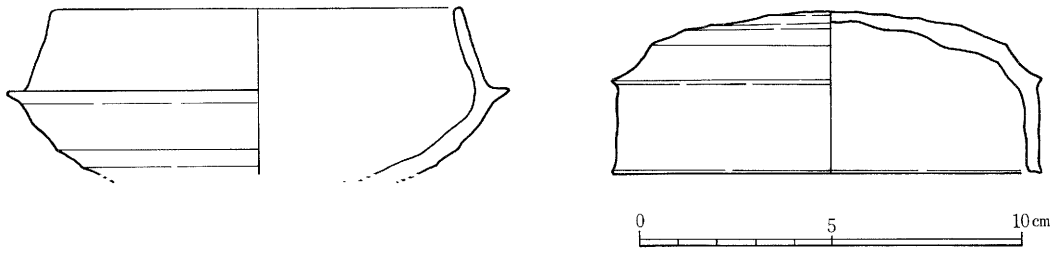
図版第五



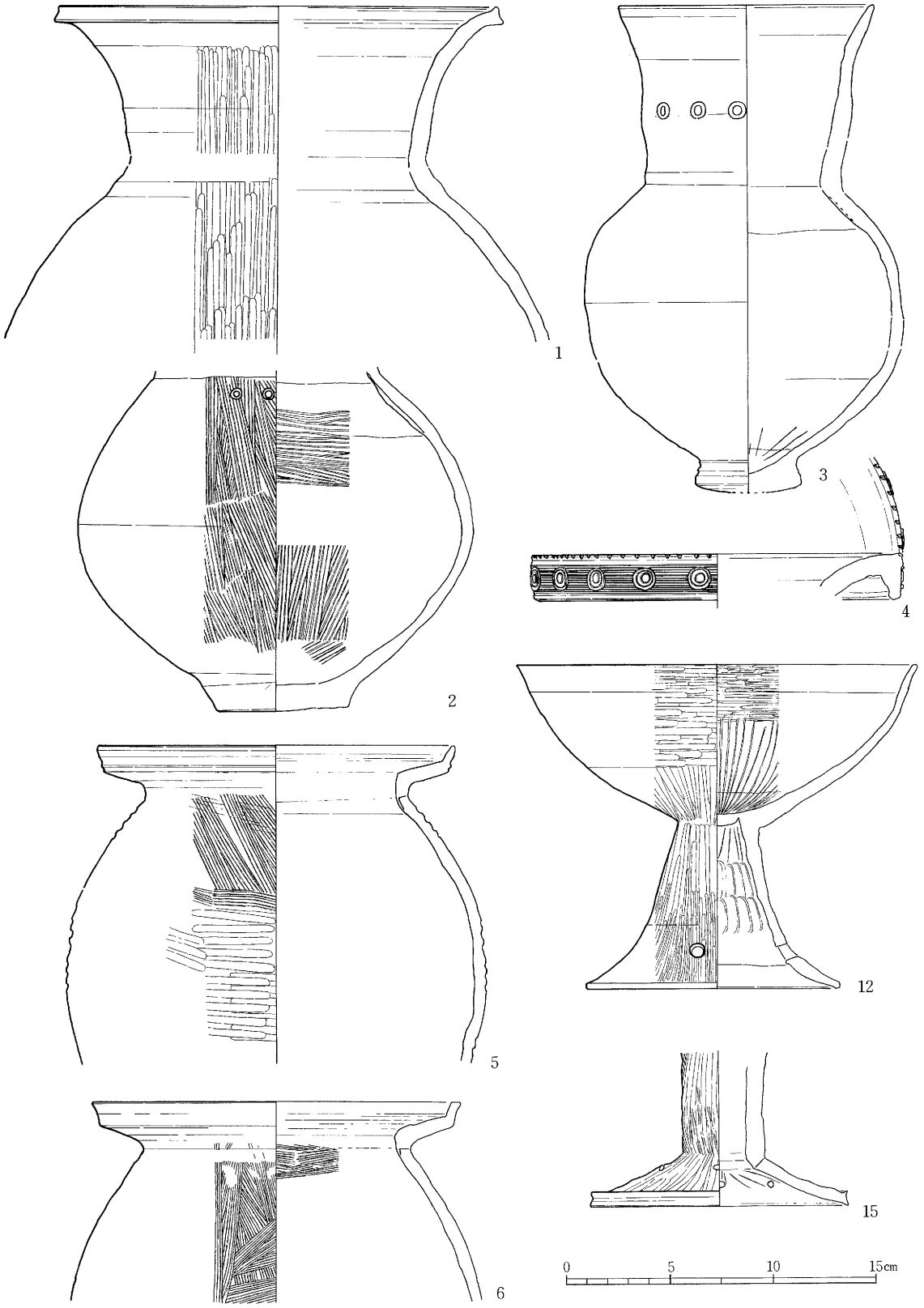


A溝断面図

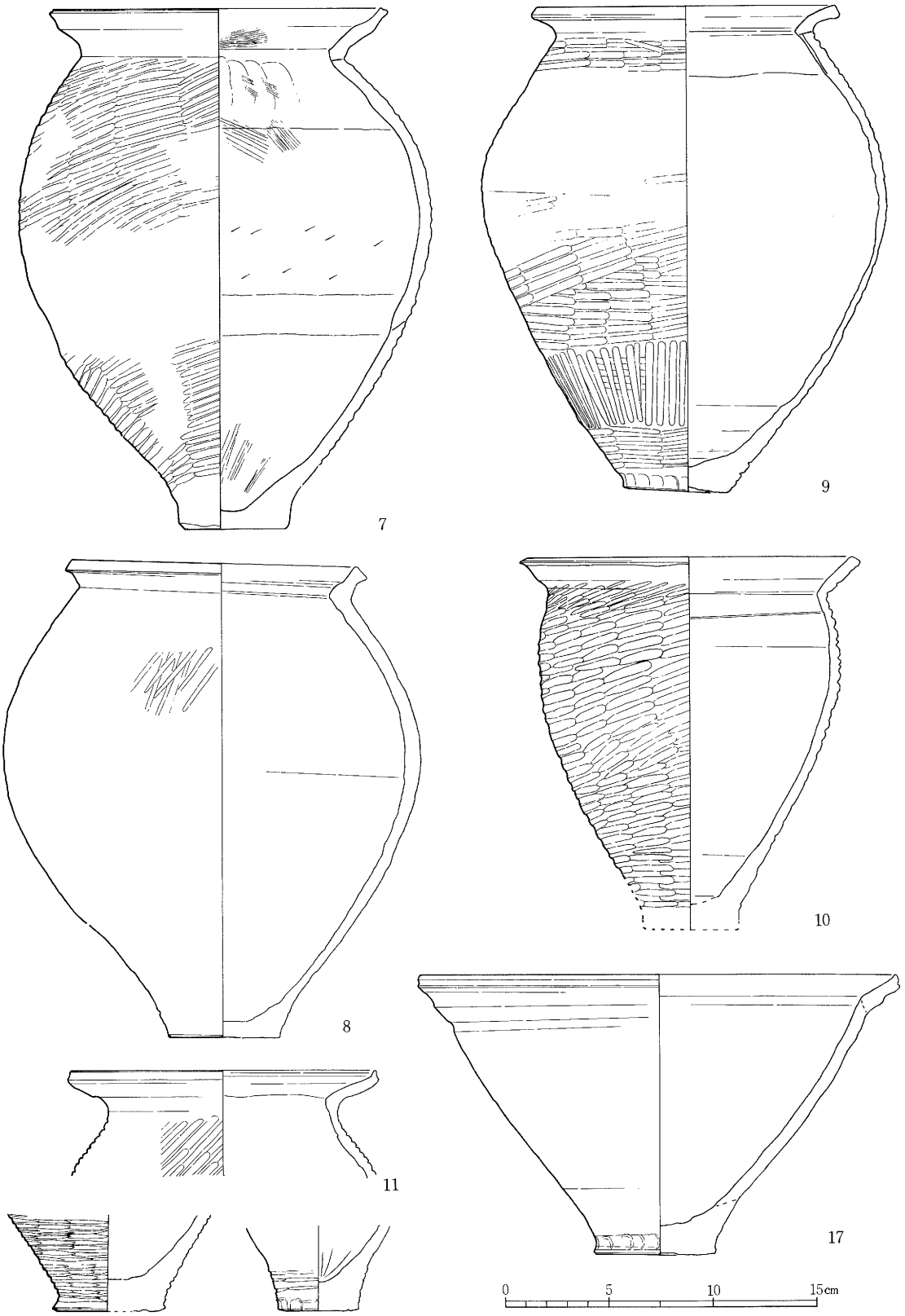
第8地点



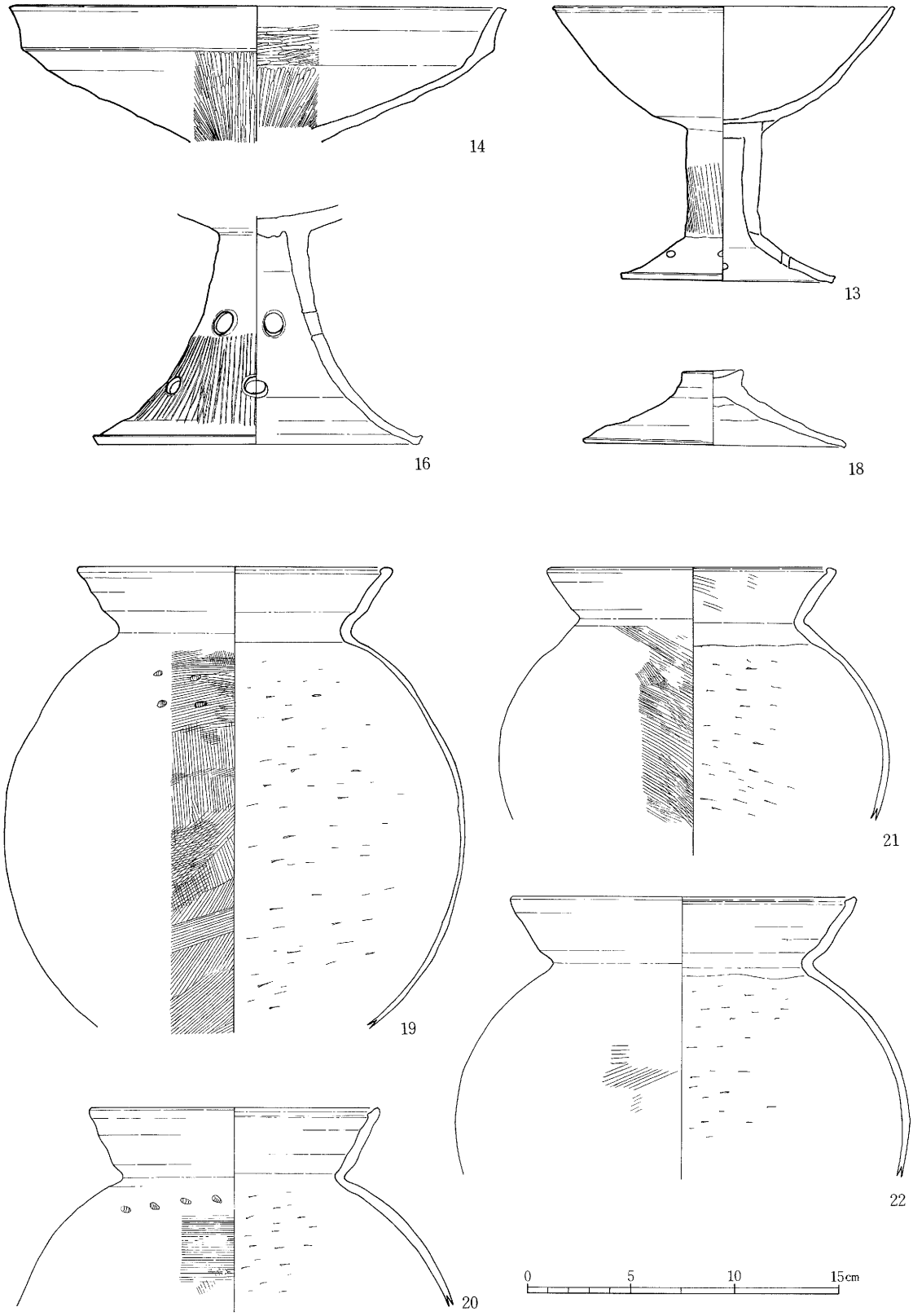
第3地点出土遺物



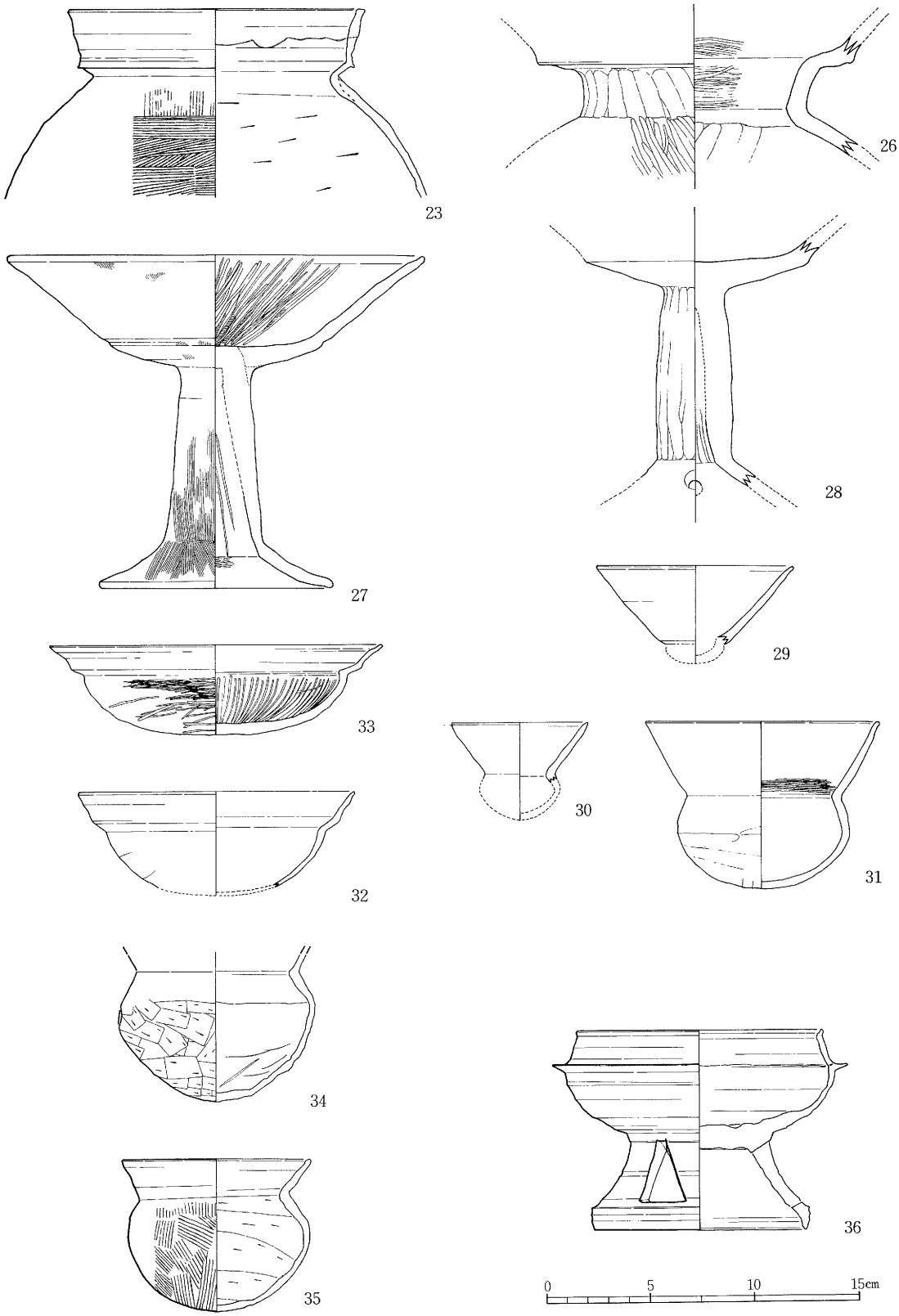
弥生式土器



弥生式土器



弥生式土器(14～18)，土師式土器(19～22)



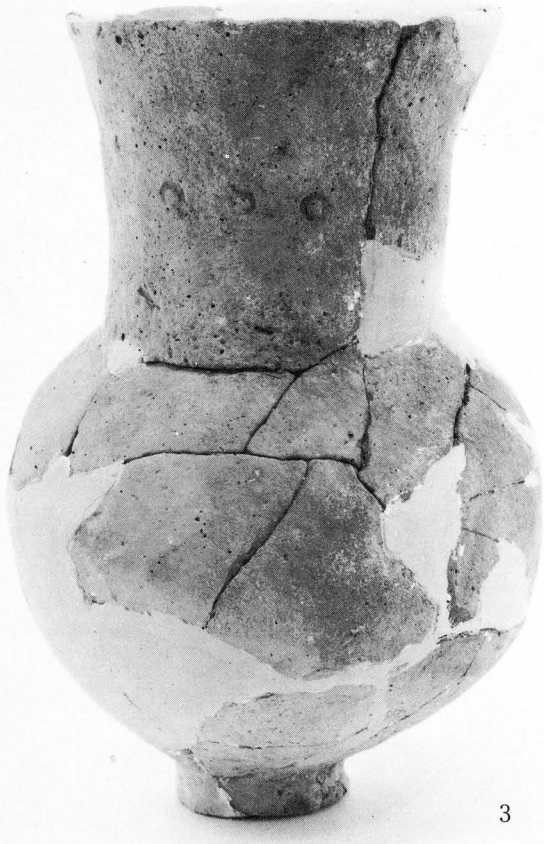
土師式土器(23～31)，須恵器(36)

A溝

弥生式土器出土状態

1

2



3

15

12

弥生式土器

7

9

8

10

弥生式土器

15

18

17

34

35

27

36

弥生式土器(15～18)，土師式土器(27～35)，須恵器(36)